

## ヴォルテール思想における靈魂について —『エウヘメロスの対話』研究II：第3、4、5の対話—

栩 木 泰

### L' Idée Voltairienne de l'Ame Etude sur les *Dialogues d'Evémère*, Les Troisième, Quatrième, et Cinquième Dialogues Yasushi TOCHIGI

#### はじめに

『エウヘメロスの対話』全12対話のうち、小論で取り上げた第3、4、5の対話に共通するテーマは、ヴォルテールが終始強い関心をいだき続けた靈魂論である。実際、この形而上学的主題を、ヴォルテールは『哲学書簡(Lettres philosophiques)』(1734)中のとりわけ第13信「ロック氏について」および付録1「靈魂についての書簡」、『哲学辞典(Dictionnaire philosophique portatif)』(1764)中の「靈魂」の項、『歴史哲学——「諸国民の風俗と精神について」序論(La Philosophie de l'histoire—Essai sur les mœurs et l'esprit des nations et sur les principaux faits de l'histoire depuis Charlemagne jusqu'à Louis XIII, Discours préliminaire)』(1765、69)中の4「靈魂についての認識」、『百科全書に関する質問(Questions sur l'Encyclopédie)』(1770)中の「靈魂」などでそれぞれ独立した章ないし項目の下に詳細な議論を展開しているほか、『ミクロメガス(Micromégas)』(1752)<sup>(1)</sup>や『アンジェニュ(L'Ingénu)』(1767)<sup>(2)</sup>のような小説においてさえ言及する機会を逃さなかった。

「形而上学的遺書」と呼ばれる本書『エウヘメロスの対話』において、聞き手カリクラテス(Callicrates)の質問に答えるかたちでエウヘメロス(Evémère)が語るところは、ヴォルテールの靈魂論の集大成であり、上記の諸著作において繰り返し展開されてきた独自の靈魂論が、とくにこの小論で取り上げる第3、第4、第5の対話に巧みに要約されているのである。

#### ヴォルテールの靈魂論の特徴

靈魂についてどう考えるか、ヴォルテールの立場は首尾一貫してきわめて明快である。彼はジョン・ロック(John Locke)の『人間悟性論(Essay concerning human understanding)』(1690)に大いに啓発され、とくに靈魂の性質については上述の『哲学辞典』第13信に「ロック氏について」と題して、古代からの靈魂論を整理したうえで、『人間悟性論』を引用紹介しながら自説を展開する。アナクサゴラス(Anaxagoras)、ディオゲネス(Diogenes)、エピクロス(Epikouros)、アリストテレス(Aristoteles)、プラトン(Platon)、ソクラテス(Sokrates)らの古代ギリシア哲学者を筆頭に、12世紀フランスの神秘家、聖ベルナルドゥス(Bernardus Claravallensis)、スコラ哲学者たち、デカルト(René Descartes)、17世紀フランスの哲学者でオラトリオ会修道士、マルブランシュ(Nicolas Malebranche)らの靈魂論を一刀両断に切り捨ててから、「これほど多くの理屈屋が靈魂の小説をつくり上げたあとで、ひとりの賢者が現われて、靈魂の歴史を謙虚な態度で書いたのである」<sup>(3)</sup>とロックを持ち上げる。ヴォルテールはデカルトの本有観念(Idées innées)を排斥し、「私は物体であり、また私は思考する。それ以上には私は知らない。」<sup>(4)</sup>と、人間唯物論ともいえるべき結論を引き出す。さらに、「思考し感覚する能力を、私の肉体に帰することができる。したがって、この能力を、『靈魂』とか『精神』とか呼ばれている、私には少しも思い及ばぬほかの存在に求めてはならないのである。」<sup>(5)</sup>と書き、

エウヘメロスがしばしば答えたように、ヴォルテールも、もともと生命とか生気を意味した「靈魂」なる語が曖昧不確定であることを強調し、そこに人間精神の限界があると主張するのである。

ラテン語(anima)とその派生言語では文字どおりには「生気を与えるもの」を意味し、生長と生命を意味するために人間のアニマ、動物のアニマ、ときには植物のアニマと言う。どの言語においても、曖昧漠然とした概念でしか用いられなかった。創世記にはこう書かれている。「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった」<sup>(6)</sup>。したがって、アニマは生命の起源ないし原因であって、肉体の死とともにいっさいが終わると一般に信じられていたのである。

靈魂の不死性について、ヴォルテールはやはり『哲学書簡』の同じ個所で、それを証明するのは不可能であるとし、「人間の理性は自分では靈魂の不死を立証するにはあまりにも無力なので、宗教がその不死をわれわれに啓示しなければならなかったのである」<sup>(7)</sup>と述べている。つまり、彼は靈魂不死説を否定したわけではなく、理性による、あるいは科学による証明が(いまのところ?)不可能であるが、古代のエジプト人、ペルシア人、インド人、中国人のように、政治的あるいは宗教的利益ゆえに不死説を唱える必要があったことを認めている。

一方、古代ヘブル人が靈魂について長い間、無知であったという点を、ヴォルテールは『哲学書簡』の中で指摘する。「この憐れな民族は迷信深く、残忍で無知でしたが、不可避な運命の力と輪廻とを認めるパリサイ派をそれでも尊敬していました。サドカイ派にたいしてもユダヤ人は同様に敬意をいただいています。サドカイ派のほうは靈魂の不死と精霊の存在とをまったく否定し、また彼らが拠り所にしていてモーゼの掟は、死後の刑罰にも褒章にもいっさい口をつぐんでいるのです」<sup>(8)</sup>。『哲学辞典』の「ユダヤ人」の項においても、神に選ばれた民どころか、ヘブル人の文化的劣性を強調している。<sup>(9)</sup>

「このような議論のすべてにヴォルテールのプラグマティズムが十分に表われている。ひとたび、靈魂の性質と不死性に関して形而上学的袋小路にはまったと見るや、彼はとりあえず徳を利するような原理と取り組むことを提案するのである」<sup>(10)</sup>。いずれにしても、靈魂に関する考え方を通して、「恥知らずを叩き潰せ(Ecraser l'infâme)」をモットーとした18世紀の大啓蒙思想家ヴォルテールの理神論(あるいは有神論)ばかりでなく、理性と科学による思考を促した哲学者の近代性がはっきりとうかがえるのである。2百数十年前のヴォルテールの靈魂論が、大脳生理学や分子生物学などの革命的進歩を見た20世紀末においても十分に通用することに気がつく、あらためて驚きを禁じえない。

#### 〈注〉

- (1) 「すると哲学者たちは、これまでと同様、一斉にしゃべり始めたが、ただ今度は全員意見が違っていた。一番の年寄りがアリストテレスを引用するかと思えば、別の者はデカルトの名を唱え、こちらがマルブランシュの名を引っぱり出すかと思えば、あっちではライプニッツ、そっちではロックという具合。一人の年老いた逍遙学派は、自信を以て声高にこう言った。『靈魂とは一個の完全体であり……』」

こうして、デカルト派、マルブランシュ派、ライプニッツ派と次々に「わたしの靈魂とは……」と自説を披露していき、やがて、

「そのすぐ近くにいささかロックを支持する者がいた。とうとうその男に質問の鋒先が廻ってくると、『自分がどうやって思考しているのかは解りませんが』と彼は言った。『しかし自分の感覚を通して思考する以外、ありえないことは解っています。非物質的で、かつ知的な実体の存在については、私は全く疑問を持っておりません。反面、思想を物質に伝えることは、神に於いてすら不可能だと言う説に関しては、非常に強い疑問を持っております……』」。川口顕弘訳『ミクロメガス』バベルの図書館7、図書刊行会、1988、pp.92-95.

- (2) 「数日の後ゴルトンは彼に尋ねました、『一體お前さんは靈魂について、我々が我々の観念を受取る仕方について、我々の意志について恩寵について、また自由意志について、どのように考えてお出でぢや』  
『何とも考えてるません』と自然児は答えました、……」。池田薫訳『自然児ランジェニュ』「バビロ

ンの王女」所収、青磁社、1947、p.72.

(3) *Lettres philosophiques*, XIIIe lettre, 中川信訳『哲学書簡』第13信、世界の名著35、1980、中央公論社、p.117.

(4) 同上、p.120.

(5) 同上、p.129.

(6) 創世記第2章7

(7) *Lettres philosophiques*, XIIIe lettre, 中川信訳『哲学書簡』第13信、世界の名著35、1980、中央公論社、p.119.

(8) 同上、p.138.

(9) 「幸いにも私はユダヤに行ったことがないし、けっして行くこともないであろう。私はユダヤからもどってきたあらゆる国の人びとに会ったが、彼らが一様に語ったところによれば、エルサレムの状況はひどく……つまり彼らの話はすべて、ベツレヘムに永く住み、この国を自然の傷物として描いた聖ヒエロニムスと同じである。聖ヒエロニムスによれば、夏のベツレヘムには飲料水さえなかった。にもかかわらず、この地方はユダヤ人にとって彼らの出身地の砂漠に比べれば楽園と映じたにちがいない」。高橋安光訳『哲学辞典』「ユダヤ」、法政大学出版局、1988、p.257.

(10) Marie-Hélène Cotoni, *Inventaire Voltaire*, Ame, Editions Gallimard, 1995, pp.48-49.

#### 〈本文試訳〉

### 第3の対話：エピクロスの哲学およびギリシアの神学について

Troisième Dialogue: Sur la philosophie d'Epicure et sur la théologie grecque

#### カリクラテス

わが善良なるエピクロス派と話をしたところ、彼らの学説は基本的にはわれわれのそれと大差ないというのが、大方の意見だったよ。きみも、永遠にして、不可思議な、目に見えない、ある力の存在を認めているが、良識の持ち主である彼らは、その力は考える動物をつくり出したくらいだから思考能力を備えていなければならない、ということを自ら認めている。

#### エウヘメロス

それは真理を知るうえで大きな一歩だ。しかし、物質自体が思考能力を備えているなどと言ってはばからない連中と議論する気にはなれんな。わたしは、「思考する存在をつくり出すには、思考する存在でなければならない」という説に基づいているが、彼らは「思想は、考えることをいっさいしない存在によって生み出されうる」、さらに言うなら、まったく存在さえしないものによっても生み出されうる、という仮説に立っているからだ。われわれには、自然などという存在物はいっさいなく、自然とは多数の事物に与えられた抽象的な名にすぎない、ということがはっきりわかっているからだ。

#### カリクラテス

それでは聞かせていただこうか、きみが神と呼ぶ、隠れた大きな力はどのようにしてわれわれに生命や感情や思想を与えるのか。われわれは靈魂をもっているが、他の動物も靈魂をもっているのか。その靈魂とはそもそもなんであるのか。それはわれわれが胎児として母親の腹の中にあるときにわれわれの体内に入り、われわれの肉体が消滅するときに体外へ出て行くのか<sup>(1)</sup>。

#### エウヘメロス

われわれのすべての能力、すべての属性、われわれが所有するすべてのものを、われわれに、動物に、植物に、太陽に、砂粒に与えたのは神であると、わたしは断固確信している。それは、われわれを産み出し、生き、考えさせる器官の中の、また万物を支配する法の中の、じつに奥深く不可思議な技術であって、すべ

てのものが存続するために必要なこの普遍的な原動力のほんの一部でも、わたしがあえて見ようとすれば、たちまち目がくらんで、圧倒されてしまうのだ。

わたしは、なによりもまずわたしを喜ばせたり、悲しませたりする感覚をもっている。この感覚を通じてわたしにやってきて、呼びもしないのにわたしの中に入ってくる観念や映像をもっている。わたしがそういう観念をつくるのではない。それらがわたしの中に相当量たまると、そのいくつかを構成する力がわたしの中に生じてくるのを感じ、大いにおどろかされる。わたしの中に生じるその、わたしが見、感じたことを再び思い出させる特性によって、わたしの頭の中に母といっしょにいる乳母の姿が浮かんだり、わたしが育った家と隣家の像が映ったりするのだ。こうして、わたしがどれひとつとしてつくったことのない多数の種々の観念を集めることになる。この操作はまた別の能力、つまり、わたしが聞いたことのある言葉を反復する能力、そしてなによりもそれに少し意味を付与する能力の結果である。それらをひっくるめて記憶と言うのだそうだ。

要するに、時を経てわたしの器官が多少とも強力になったとき、さまざまな観念を感じたり、再び思い出したり、集めたりするわたしの能力が靈魂と呼ばれるものだと言うんだな。

この言葉は、生気を与えるもののみを意味し、それしか意味することができない。東洋のすべての国民は、われわれが靈魂と名づけるものに生命という名を与えている。つまり、われわれは定義できない事象に対して普遍的、抽象的な名前を与える能力をもっているということだ。われわれは欲求をもつ、が、われわれの体の中に欲求と呼ばれる実在などはいっさい存在しない。われわれは願望をもつ、が、われわれの心の中に意志と呼ばれる小人格が存在するわけではない。われわれの脳内に想像をする特別の存在があるわけではないのに、われわれは想像をする。すべての国の人間が、理性を働かせ考える人間のことだが、自分が感じること、見ることの効果や作用全体を表現するための普遍的な用語を発明したのだ。彼らは生と死、力強さとひ弱さと言った。とはいえ、ひ弱さにせよ、力強さにせよ、死にせよ、生にせよ、実在するものはいっさいない。しかし、こういう表現方式はごく便利なので、理性ある諸国民に昔から採用されてきたのだ。

これらの表現法は議論の能力のために役立ったとしても、多くの取り違えをつくり出した。たとえば、画家や彫刻家は力強さを表現しようとして、毛むくじゃらの胸と筋肉隆々たる腕をもつ大男を描き、ひ弱な感じを出そうとして子供を描いた。このようにして、情熱、美德、悪徳、歳月、日々が擬人化された。人間はこの絶え間なく続けられる偽装によって、彼らの能力、属性、その他の自然との関係のいっさいを実在と見なし、言葉を物と見なす習慣を見につけたのだ。

この抽象的な言葉である靈魂<sup>(2)</sup>について、彼らはわれわれの体内に棲む一つの人格をつくったのだ。その人格を3分したのだが、いわゆる哲学者たちは、この3という数は完璧だと言う。単一性と二重性とから成るからだ。

彼らはこの3つの部分のうちの1つを5感を司るものとし、これをプシケと名づけた。第2の部分は胸部にあるプネウマ、すなわち風、息吹、霊。第3は頭の中にある思考、ヌースだ。これら3つの靈魂から、人が死んだとき、もうひとつ、4番目の部分をつくった。これがスキア、つまり亡霊、死者の霊、小悪魔だ。

やがて、この靈魂という語を口にしても、意味が通じなくなった。この語を聞いた者から無数の質問が発せられ、ために賢者は沈黙を余儀なくされ、ペテン師が多弁を弄する事態となったのだ。この靈魂は、永遠のデミウルゴス<sup>(3)</sup>によって創られた最初の男からきたのだろうか、それとも最初の女からきたのだろうか。それとも、あの世で同時につくられ、それぞれ順番にこの世に降りてきたのだろうか。その実質はエーテルなのか、火なのか、それともそのどちらでもないのか。生殖力をもつ液体とともに靈魂を放射するのは妻なのか、夫なのか。子宮内に到達するのは子供の手足ができる前なのか、後なのか。胎児が閉じ込められている羊膜の袋の中で、感じたり考えたりするのだろうか。肉体が大きくなると、その実在も大きくなるのだろうか。どの靈魂もすべて同じ性質をもっているのか。オルフェウス<sup>(4)</sup>の靈魂と白痴のそれとの間に差異はまったくないのだろうか。

この靈魂がひとたび子宮を脱出し、尿で満たされた膀胱や糞便の詰まった汚ない腸に入ると、この人格は

はたして無限、永遠、抽象、具象、美、善、正義、秩序といった概念を十分にもってこの汚水溜の中に入ってくるのかと、疑問があえて発せられた。さらに、このあわれな被造物は常に、人が熟睡中、泥酔時、卒中や癲癇の発作を起こす前の茫然自失状態のさなかに思考するかのように思考するのかどうかを知ろうとして議論をした。偉大なる神よ、こういう無知な人間どもの間でなんという愚劣な論争がたたかわされたことか。要するに、肉体がもはや存在しなくなったら、この靈魂はどうなるのかということだ。人類の偉大なる教師、オルフェウスとホメロスは言っている、靈魂とはスキアであり、亡霊であり、小悪魔であるとね。オデュッセウスは冥府の入口で小悪魔や亡霊に出会うが、彼らは穴の中で血をなめ、乳を飲むために来るのだ<sup>(5)</sup>。ピュトン<sup>(6)</sup>の才気をもつ魔法使いや女魔法使いは死者の霊を、地上から昇る亡霊たちを呼び起こす。禿鷹に肝臓を食われる靈魂もいれば、絶えず樹木の下を散策する靈魂もいる。そこにこそ最高の至福があり、それがホメロスの樂園というわけだ。

立派な人間はこんな愚にもつかぬ児戯に満足しなかった。わたしはといえば、神に助けを求めて、こう言うことにした。「わたしのいっさいは、自然の絶対的な支配者であるあなたの賜物です。あなたはわたしに食べたり歩いたりする能力を与えられたように、感情と思考との才能をお授けになりました。わたしはそのことを感謝しておりますので、あなたの秘密を尋ねたりはいたしません」。わたしに言わせれば、この祈りのほうが、プシケだの、プネウマだの、ヌースだの、スキアだのと際限もなくくだらん議論をするよりずっと理にかなってるよ。

#### カリクラテス

もしきみが、われわれの靈魂の代わりをするのが神だと信じているとすれば、きみは神が動力を支配する機械にすぎないということにならないか。きみは神の中にいて、いっさいを神の中で見、神がきみの中で働きかけるわけだからな。率直に言って、きみはその理論体系のほうがわれわれのそれに勝っているのかい？

#### エウヘメロス

自分を信頼するより神を信頼したいね。哲学者の中にはそう考える者がいる。数が少ないだけにかえって、彼らの考え方は正しいと思いたくなるよ。彼らは、労働者は自分の仕事の支配者でなければならず、この宇宙には至高の職人の支配を受けたくないようなものはなにと生じ得ない、と主張している。

#### カリクラテス

なんだって！ きみは、神は休む暇もなくその機械を全部動かしているとまで言うつもりかい？

#### エウヘメロス

神がわたしをお守りくださるさ。とかく論争とはそんなものだが、論敵に、彼がいっさい口にしなかったことを言わせるってわけだ。わたしの言いたいのはその逆で、永遠なる絶対者ははるか昔に、すべての存在によって常に成し遂げられる法則を打ち立てたということだよ。ひとたび神が命ずれば、宇宙は常に従うのだ。

#### カリクラテス

わがエピクロス派神学者たちは、神を罪人にしたときみを非難するんじゃないかな。だって、もし神がきみを活気づけ、きみが過ちを犯したら、その過ちを犯したのは神ということになるからね。

#### エウヘメロス

その非難なら、すべての宗派に対して言えるさ、無神論者は別だがね。神の絶対的な力を認めるすべての宗派が自分では防ぎようのない罪を神の力のせいにするんだ。彼らは神にこう言う。万物の長たる主よ、あなたはいっさいの悪を遠ざけるべきです。あなたがおつくりになった場所に敵に侵入されたとしたら、それはあなたのせいです。すると、神が答えて言う。わが娘よ、わたしは相矛盾することを行うことはできない。善が存在するときに悪が存在しないのは矛盾である。火があって、その火が燃焼を引き起こすことができないのは矛盾である。水があって、その水が動物を溺れさせることができないのは矛盾である、と。

#### カリクラテス

きみはその回答で十分だと思うのかい？

エウヘメロス

これ以上の回答を知らないね。

カリクラテス

気をつけたほうがいい。エジプトやギリシアでは神々の崇拝者たちは悪事が罰せられるタルタロス<sup>(7)</sup>を発明したとき、きみよりもっと筋の通った理由づけをしたと言われるだろうよ。それなら、神の裁きは正当化されるわけだ。

エウヘメロス

妙な方法で神々を正当化するもんだな。それに、彼らの神々といっても、姦通者に、人殺しに、猫に、鰐じゃないか。いまは、なぜ悪が存在するかを知ることが問題なのだ。きみたちのギリシア人にしろ、エジプト人にしろ、罪や永遠に続く拷問を次々とわれわれに見せることによって、その恐怖を和らげていると言うのかい？ 彼らの神々は、タンタロス<sup>(8)</sup>を産んで、その息子をシチューにして食い、永遠に食卓についたまま飢えに苛まれる運命にした残忍きわる怪物ではないのか。別の王は、蛇に囲まれた車輪を絶え間なく回すはめになるし、また別の王の49人の娘たちは夫の喉をかつ切ったために、永遠に空の樽に水を満たす罰を受けたではないか。この49人の王女にしても、その他地獄に堕ちた王たちにしても、この世に生まれてこなかったほうがずっとよかったのは確かだよ。彼らがこの世に生まれず、罪も犯さず、責め苦も受けずにすませるのが一番簡単だったのだよ。きみたちのギリシア人は、神々を、不幸な罪人をつくり出し、行きずりに罪を犯させ、際限のない責め苦に堪えさせることに休む暇もなく熱中する暴君か不死身の死刑執行人みたいを描いているのだ。この神学こそ残忍そのものだと、認めたらどうだい。エピクロス派の神学はもっと人間的だ。しかし、わたしのそれはもっと神的だとあえて信じたいね。わたしの神はエピクロスの神々みたいに無気力で享樂的なものでもなければ、エジプトやギリシアの神々みたいに野蛮な怪物でもないんだ。

カリクラテス

わたしだって、ほかのどの神よりもきみの神のほうが好きさ。しかし、わたしにはまだ釈然としないことがたくさんある。次の対話でその点を晴らしていただきたいものだ。

エウヘメロス

きみにわたしの意見を言うときは、かならず疑念として提示することにするよ。

#### 〈注〉

- (1) 古代の「発生学者は」は、靈魂は男児の場合には妊娠40日頃になってようやく体内に入り、女児の場合にはこの時間は少なくとも2倍かかると考えていた。しかし、『神聖発生学(*l'Embryologie sacrée*)』(1817年にカーンで抄本が刊行された)は、このあまり女性に優しくない区別を排し、男女の別なく「胚は妊娠時にある程度の靈魂をもっている」ことを認めている。Notes du Troisième Dialogue 1., CE, p.43.
- (2) この語については、『哲学辞典(*Dictionnaire philosophique*)』および『哲学(*Philosophie*)』『メンミウスのキケロへの手紙(*Lettres de Memmius à Cicéron*)』『メンミウス論(*Traite de Memmius*)』第14項を参照。同上、2, p.43.

この原注の意図は不明だが、『哲学辞典』「魂」の項の冒頭にこうある。「自己の魂を観察するのは立派なことであろう。『汝自身を知れ』とはすぐれた教訓である。だが、それを実行できるのは神だけである。神以外のいかなる者に魂の本質を知ることができようか。われわれに活気を与えてくれるものを魂と呼ぶ。われわれの知性の限界のおかげでそれ以上はわからないのだ」(高橋安光訳、法政大学出版局、1988、p.11.)

- (3) 造物神。プラトン哲学で世界の形成者、建築者としての神。
- (4) ギリシア神話。ホメロス以前の最大の詩人といわれた伝説上の詩人、音楽家。亡き妻を連れ戻すために冥界に行くが、地上に戻るまで後ろを振り向くという禁を破ったため、妻を永遠に失ったという。

- (5)「さて亡者の群に祈って嘆願した後、羊を掴まえ穴に向けて頸を切ると、どす黒い血が流れ、世を去った亡者たちの霊が、闇の底からぞろぞろ集まってきた」。松平千秋訳、ホメロス『オデュッセイア』上、第11歌冥府行、岩波文庫、1994、p.278。
- (6)ギリシア神話。ガイアの子。デルフォイにあって神託を与えていた大蛇。アポロンに殺された。
- (7)ギリシア神話。ゼウスの怒りを受けた神々が墮とされた地獄の底。
- (8)ギリシア神話。ゼウスの子。地獄に墮ちて永久に飢えと渇きに堪える罰を受けた。

#### 第4の対話 もしも行動する神が、なにもしないエピクロスの神々に勝らないとしたら

Quatrième Dialogue: Si un dieu qui agit ne vaut pas mieux que les dieux d'Epicure, qui ne font rien

#### カリクラテス

地球全体、その地球を取り巻くもの、人類と動物種、われわれを越えるいっさいのもの、一言で言えば宇宙、がひとりてつくられたのではなく、そこには無限の技術が支配していることは、わたしも納得する。唯一の職人<sup>アルティゼン</sup>の手になるという、エピクロス派の多数の分派が排斥する考え方を、わたしは敬意をもって受け入れるよ。その自然の宗主は多くの点でティマイオス<sup>(1)</sup>の神、オケルス=ルカヌス<sup>(2)</sup>とピュタゴラスの神であったものだと思う。その神は無から物質をつくりはしなかった。なぜって、無というのは、きみも知ってのとおりに、属性をいっさいもたないからね。無よりなにもものも生ぜず、なにもものも無に帰すること不可能なり<sup>(3)</sup>だよ。思うに、物事の普遍性はこの神から発している。この神だけが、それ自身で存在するものだし、その全体が作品だからだ。この神は、自らの知恵と力とに由来する普遍的な法則に従って万物を配置したのだ。わたしは、きみの哲学の大部分を、たとえそれがわれらが賢人の大多数を憤慨させるものであっても、認めることにしよう。ただし、わたしを当惑させる難点が2つある。きみはきみの神を十分に自由にも公正にもしていないような気がするのだ。

きみの神は少しも自由ではない。なぜなら、それは必要な存在であり、そこから必然的に膨大な事物が発しているからだ。きみの神は少しも公正でない。なぜなら、善人の大部分が生きている間に迫害を受けているが、彼らは死んだら公正に扱われ、悪人は死後罰せられると、きみはわたしにいっさい言わないからだ。ギリシアやエジプトの宗教はきみの神学よりはるかに勝っている。罰や償いというものを想像したからね。わたしに言わせれば、それが人間を導く唯一の方法だよ。なぜきみはこの点を無視するのかね？

#### エウヘメロス

まず自由についてお答えし、次に公正についてお答えすることにしよう。自由であるとは、望むことをすることだ。しかるに、神はまちがいなく彼が望んだことをすべて行なった。神はわれわれにそのすばらしき自由の一部を分け与えてくれ、おかげでわれわれは自分の意志に基づいて行動するとき、その自由を享受しているわけだよ。神はさらに慈悲を押し進め、この特権をすべての動物にまで授けたため、動物たちも自分の能力の及ぶ範囲で望むことをしているのだ。

神はきわめて力強く、自由ではあるが、無限にそうだとわたしは言わないことにする。なぜなら、地理学者がどう言おうと、実際の無限<sup>(4)</sup>とはなになのか、わたしは知らないからだ。きみにはこう言うだけにしておこう、神は不可能なことを行なうには自由ではないと。なぜなら、それは用語の矛盾だからだ。ピュタゴラスの直角三角形の2辺がつくる2つの正方形は大きい辺のつくる正方形よりも小さいあるいは大きいと言うたぐいのことを行なうには不自由だ。なぜなら、それは矛盾しており、不可能なことだからだ。わたしがさっき言ったのはおおよそそんなことなのだ。つまり、神はきわめて完全であるため、悪を行なう自由をもたないのだよ。

公正についてだが、もしわたしがきみに向かってギリシア人の地獄の話などしたら、きみはわたしを大いにばかにするだろうよ。3の口で吠えるという彼らの番犬のケルベロス<sup>(5)</sup>、3人のパルカたち<sup>(6)</sup>、3人のエウメニスたち<sup>(7)</sup>なんぞは子供でも聞いたら笑うほどのばかげた想像の産物さ。アレクサンドロスがカリステネス<sup>(8)</sup>

を不当に殺したからといって、神がわたしの前に姿を現わし、大王が地獄の復讐の女神たちに鞭打たれるところを見せたりはしなかった。カリステネスが第10の天界で神と並んで食卓につき、ヘーベ<sup>(9)</sup>の手で注がれるネクタル<sup>(10)</sup>を飲むところなど、見たことがないね。神は、神が存在することを納得させるに足る理由をわたしに与えたが、フレゲトン<sup>(11)</sup>の川縁や最高天<sup>(12)</sup>で起きていることが見えるほど遠目が利く視力を与えてはくれなかったのね。神が罪人に科す懲罰だの、義人に与える報償だのについては敬意を込めて沈黙を守ることにするよ。わたしがきみに言えるのは、幸せな悪人というものは見たことがないが、非常に不幸な善人ならたくさん見ているということだけだ。この点ではわたしだって腹が立つし、首をひねりたくもなるさ。しかし、エピクロス派にしたって、わたしと同様に難題に苦しんでいるじゃないか。彼らだってわたしと同じように、罪が勝利を収め、徳が背徳者たちの足下で蹂躪されるのをいやというほど見せつけられて生き、苦しまねばならないのだ。ならば、はたして、いっさいの希望を抱かないことが、良きエピクロス派にとつてと同様に正直者にとつても大いになる慰めとなるだろうか。

### カリクラテス

そのエピクロス派のほうがかみよりもはっきりすぐれている点がひとつあるよ。彼らは、徳に救いの手を差し延べない至高の存在を、公正なる神を、いっさい非難しないのだ。彼らが神々の存在を認めたのは、アテナイのならず者たちを怯えさせないようにとの礼儀からそうしたにすぎないのであって、神々を人間の創造主にしたり、審判者にしたり、処刑人にしたりしないからね。

### エウヘメロス

きみたちのエピクロス派のほうがかより人間の味方だろうか、徳に対しより確固たる基礎を与えているだろうか、飲んだり食べたりに忙しい、役にも立たない神々しか認めないことでわれわれの悲惨をより慰めているのだろうか。シチリアの片隅に、神についてああだこうだと議論する2本足の動物の小さな社会があったところで、それがどうだっていうんだ。

われわれが死後に幸せになるか不幸せになるかを知るには、感覚器官がすべて壊れてしまっても、われわれの中に感じるなにもものかが存在しうるかどうかが、思想が形成される脳髓が虫に食われ、その虫も脳髓も塵になってしまっても、考えるなにもものかが存在しうるかどうかが知らねばならない。もし、ある動物がもはや存在しなくなっても、その属性であるひとつの能力がなお存続しうるかどうかが知らねばならない。これは、いかなる宗派も、これまで解くことのできなかった問題だよ。だれも、その意味を理解することさえできなかったのだ。というのは、食事中にだれかがこんな疑問を呈したのだ。この皿の中にある兎は、走る能力を残しているだろうか、この鳩は、いまでも空を飛ぶ能力をもっているだろうか、とね。この疑問はばかしく、嘲笑を買うだけだった。なぜか。矛盾というか、不可能なことは一目瞭然だからだ。神は不可能なこと、矛盾することをなしえないと、われわれはきんぎん見てきてわかっているからだ。

しかし、もし神が、人間と呼ばれる考える動物の中に、目に見えず手で触れることのできない火花を、宇宙の構成要素の原子よりも触知不可能なものを、ギリシア哲学者たちが単子<sup>モノアド</sup><sup>(13)</sup>と呼んだものを置いたとすれば。もし、この単子が壊れないものだとしたら、そして、われわれの中で考えたり感じたりするものがこれだとしたら、もはや次のように言ってもばかげているとは思わない。この単子は、それを靈魂とする肉体が滅びても、存在できるだろうか、思想や情念をもちうるだろうか。

### カリクラテス

その単子の発明がまったくばかげているわけではないとしても、きわめて不確実だということと、その哲学が蓋然性に基づくものであってはならないということは、きみも認めるだろう。もしひとつの原子から不滅の靈魂をつくるのが許されるとすれば、その権利が与えられるのはエピクロス派にだろう。つまりところ、エピクロス派は原子を発明したわけだからね。

### エウヘメロス

たしかに、わたしは証明するためにわたしの単子をきみに提供したわけじゃないさ。しかし、たとえ不完全であろうともわたしは、われわれの体の目に見えない重要なある部分が、われわれの死後に罰せられるか



償われるかを、悦楽に泳ぐか懲罰に苦しむかを示すギリシア人の想像力のように、きみに單子を提示したことになるのだ。わたしの推論と仮説とをもってしても、神が人間を死後に苦しませる懲罰の中に正義を見出すことができるかどうか、まだわからない。なぜなら、要するにひとはわたしにこう言うだろうからだ。人間をつくり出しておきながら、彼らに悪事を働かせたのが神ではないのか、そうであるなら、なぜ人間を罰するのかと。たぶん、神を正当化する方法はほかにあるのだろうが、われわれはその方法を知らないのだ。

#### カリクラテス

つまり、きみは、わたしに話して聞かせているその靈魂がなんであるかも、きみの説くその神についても、正しくは知らないということかい？

#### エウヘメロス

そうだ。そのことを、きわめて謙虚に、きわめて辛い気持ちで認めるよ。それらがどういう物質でできているのかを知らないし、わたしの思想がどのようにして形成されるのかを知ることができない。神がどのようにしてつくられるのか、想像できない。要するに、わたしは無知なのだよ。

#### カリクラテス

わたしも同じさ。お互いに慰め合うほかないな。すべての人間がわれわれの仲間というわけか。

#### 〈注〉

- (1) プラトンの対話篇『ティマイオス』に出てくる古代ギリシアのピュタゴラス派哲学者、ロクリスのティマイオス(前5世紀頃)。
- (2) ピュタゴラス学派のオケルス(Ocellus)を指すと思われるが、それ以上は不明。
- (3) De nihilo nihilum, in nihilum nil posse reverti. ペルシウス・フラックス『諷刺詩』(Aulus Persius Flaccus, *Satirae*) III, 84. ペルシウス・フラックスはローマの詩人(34-62)、『諷刺詩』6篇の作者。ギリシア人カリクラテスが数世紀後のラテン詩人を引用している。本書においてヴォルテールが時代を無視した多数の例の一つ。
- (4) 地理学者の無限はここで言う現実的無限(l'infini actuel)とはなんの関係もない。無限の大きさとは、人がそれをどのくらいの大きさと考えようとも、同じ種類の中で与えられたいかなる数量よりも大きい数量のことである。無限に小さい数量とは、所与のいかなる数量よりも小さい数量のことであり、限度と考えられるゼロであり、減少する数量の終点である。これらの数量は関係をもっており、無限の計算やこれらの関係を計算する技術を科学と名づけたのである。Notes du Quatrième Dialogue, 2, CE, p.51.
- (5) ギリシア神話の、冥界の入口を守る、3つの頭と蛇の尾をもつ番犬。
- (6) ローマ神話の運命の女神。ギリシア神話のモイラ(Moira)と同じ。運命を割り当てるラケシス(Lachesis)、運命の糸を紡ぐクロト(Klotho)、運命の糸を絶つアトロポス(Atropos)の3女神を指す。
- (7) ギリシア神話。原意は「善意の、好意の」だが、もともとはエリーニュスたちと呼ばれ、殺人その他自然の法に反する行為に対する復讐の女神、アレクトー(Alekto)、ティシボネー(Tisiphone)、メガイラ(Megaira)の3女神であるとされた。
- (8) カリステネス(Kallisthenes)、ギリシアの歴史家(前370-327)、アリストテレスの甥。アレクサンドロスのアジア遠征に随行したが、大王が東洋式の跪拝の礼を要求すると、これに反対したため、処刑された。
- (9) ヘーベ(Hebe)、ギリシア神話で青春の意。ゼウスとヘーラーの娘で、神々の酒間を取り持った。ヘラクレスの昇天後、妻となり、若返らせたという。
- (10) ギリシア神話で神々が飲む不老不死の酒。
- (11) 冥界の火の川。
- (12) 宇宙に4層ある天界の最上層で、神々が住むとされた。
- (13) これらのギリシア哲学者の筆頭はドイツ人のライプニッツである。ライプニッツ派によれば、<sup>モナド</sup>單子とは、単一にして部分のない存在であり、他のすべての存在はこの單子から成るという。

## 第5の対話 奈落の淵を掘るあわれな者。動物種のすべての行動原理である本能

Pauvres gens qui creusent dans un abyme. Instinct, principe de toute action dans le genre animal

### カリクラテス

きみはなににも知らないというなら、お願いだから、きみがこうではないかと思うことを話してみてくださいな。きみは自分の考えをわたしにすっかり打ち明けることを、まったくしていないではないか。口を慎むのは、信用していない証拠だ。率直さを欠く哲学者は政治家にすぎんよ。

### エウヘメロス

わたしが不信の念をもつのはわたし自身に対してだけだよ。

### カリクラテス

さあさあ、思っているところを話してみたまえ。あてずっぽうで言ってみれば、ときにはまぐれ当たりということもあるからな。

### エウヘメロス

それじゃ、言ってやろう。いつの時代のどこの人間だって、およそきみがわたしに質問するような事柄については、ありふれた答えしか言わなかったし、言えなかったのさ。わたしがとりわけ言いたいのは、そんなことを教えてもらったところで、まったくの無駄だろうということだよ。

### カリクラテス

無駄だって！ それどころか、われわれは靈魂をもっているか、靈魂はなにによってできているかを知るのは絶対必要なことではないのか。靈魂の可能態は靈魂の本質とは異なるものであること、靈魂はすべてであること、それはアリストテレスがいみじくも言ったとおり、形相とエンテレケイア<sup>(1)</sup>であるから、敏感な徳そのものであること<sup>(2)</sup>、とりわけ、良知<sup>(3)</sup>は習慣的可能態ではないこと、これらがはっきりわかるとすれば、これにまさる喜びはないではないか。

### エウヘメロス

それは大いにけっこうなことだ。しかしな、そういう崇高な科学は、どうやらわれわれには禁じられているらしいのだ。神がそれをわれわれに与えなかった以上、われわれには必要ないものでなければならない。たぶん、神から授けたのは、この人生においてわれわれを導くのに役立つものの、理性、本能、運動を始める能力、われわれの種のある存在に生命を与える能力だろう。これらの天賦の能力のうちの筆頭は、われわれを他のすべての動物から区別する能力だが、その原理がなんであるかを、神はけっして教えなかった。つまり、われわれがそれを知ることが、神は望まなかったということだよ。われわれは、なぜ、動かしたいときに自分の指先を動かせるのか、われわれの手足の一つのその小さな動きとわれわれの意志との間にどんな関係があるのか、察することさえできない。指先の動きと意志の間に無限の存在がある。神からその秘密を無理やり引き出そうとしたり、神がわれわれに隠していることを知ろうとするのは、わたしには一種の愚かな冒瀆のように思えるのだ。

### カリクラテス

なんだって！ 靈魂とはなにかを、わたしは絶対に知ることができないというのか。わたしが靈魂をもっていることが証明されることはない？

### エウヘメロス

そのとおりさ。

### カリクラテス

それでは、きみがさっき話してくれたわれわれの本能とはなにかを、聞かせてもらおうか。神はわれわれに理性だけでなく本能も授けたときみは言ったが、わたしには、この属性は動物のみに与えられたものであって、この属性がなにを意味するか、よくわかっていないように思えるのだ。これはわれわれのものとは異

なる種類の靈魂だと言う者がいるかと思えば、他の器官をもつ同じ靈魂だと言う者もいる。なかには、ひとつの機械にすぎないとまで言い切る夢想家もいる。<sup>(4)</sup> で、きみはどう考えるのだい？

#### エウヘメロス

わたしは、神はわれわれにも動物にもすべてを与えたと考える。それに、動物のほうがわれわれ哲学者よりずっと幸せだともね。動物たちは、自分が知らないことを神が望んでいるのだということを知ろうと苦勞したりはしないし、彼らの本能はわれわれのそれより確かなものだ。彼らは死後に自分の能力がどうなるかについて、理論を立てたりしない。蜜蜂は、いつか、その体がブンブン羽音をさせながら三途の川を渡るとか、その亡霊がエリュシオンの野<sup>(5)</sup>で蜜や蜜をつくることになるなどと巣の中で教えるほど愚かではなかったのだ。この種のたわごとを考えつくのは、われわれの狂った理性くらいのものだよ。

われわれの本能はなにも知らないから、もっとはるかに賢明なのだ。赤ん坊は、乳母の乳房にしゃぶりつく口の中で真空になるため、乳房から乳が吸い出されて赤ん坊の胃に流れ落ちるということを知らなくても乳房をしゃぶるのは、本能がそうさせるわけだ。赤ん坊の行為はすべて本能に基づいている。少し力がついてきてからは、赤ん坊は転ぶと、両手を顔の前にあてがう。溝を跳び越えたいと思うとき、走りながら体に新たな力を加えるが、速度によって質量が倍加される結果を学んだからそうするわけではない。川の上に幅の広い板が流れているのを見つけると、度胸さえあれば、その板に乗って向こう岸に渡ろうとするが、それは、自分の体重と板の重さを合わせても、同じ体積の水よりも軽いということを見抜いてのことではない。石をもちあげようとすれば、棒切れを梃代わりに使うが、それは動力理論をはっきり知っているからではない。

子供が教育を通じて教わった理論の効果であるように見える行為でさえ、じつはこの本能の効果なのだ。子供は阿諛追従とはどんなことかを知らなくても、欲しいと思うものを与えてくれそうな人に対しては、ご機嫌を取らずにはいないものだ。もし、ほかの子供とけんかをして殴られ、血が出たのを見たら、自己反省などはいっさいなしで、大声を出したり泣いたりして、助けを呼ぶだろう。

#### カリクラテス

きみは例をたくさん挙げたけど、要するにその本能とはそもそもなんぞやと言うと？

#### エウヘメロス

反射を予告するいっさいの感情と行為だよ<sup>(6)</sup>。

#### カリクラテス

しかし、きみはそこが不可思議な性質だと言うが、多くのギリシアの哲学者にとってじつに不可思議なそういう性質は、いまではばかにされていることを知っているだろう。

#### エウヘメロス

しかたないさ。不可思議な性質を尊重しなければならなかったのだ。龍涎香が引き寄せる1本の草から宇宙で多数の天体がたどる軌道まで、チーズに巣くう虫から銀河<sup>(7)</sup>まで、きみが落下する石を考えようと、天空を横切る彗星の運行を追おうと、すべては不可思議な性質なのだ。

この語は、われわれの無知のりっぱな告白だよ。偉大なる世界の建築家はわれわれに、その作品のいくつかを測定し、計算し、計量する機会を与えたが、最初の原動力を発見することは許さないのだ。カルデア人<sup>(8)</sup>は、惑星の周りを回るのは太陽ではなく、逆に太陽の周りを異なる軌道によって回るのが惑星であることをすでに予想していたが、惑星を西方から東方へと運ぶ秘密の力の正体を発見できるとはわたしには思えない。物体の落下を計算することはできるだろうが、それらを落下させる力の根源的な理由を発見できるだろうか。男たちは昔から子づくりに励んできたが、自分の妻がどのようにするのかを知らない。われらがヒポクラテスは、この重要な謎については、助産婦の推論程度にしか述べていない。肉体と精神についてなら際限もなく議論するがいい。だが、本能は常に地球上を支配するだろう。恋の情熱は本能の所産であり、情熱は常に支配するからだ。

#### カリクラテス

だとすれば、きみの神は悪の神にすぎないことになるな。神は、われわれがこの忌まわしい情熱に耽溺するためにのみ、われわれを生まれさせたわけだ。人間を悪魔に引き渡すためにつくったわけだ。

#### エウヘメロス

まったく違うね。すばらしい恋の情熱があつて、神はそれを管理する理性をわれわれに与えたのだ。

#### カリクラテス

で、そのなさない理性とはなんなのだ？ それも別の種類の本能だと言うつもりかい？

#### エウヘメロス

ま、そんなところだな。過去を現在と比較し、未来に備えるための説明しがたい天賦の能力だ。それがすべての社会、すべての制度、すべての秩序の根源なのだ。この貴重な能力は神のもう一つの贈り物の結果であつて、やはり不可思議なもので、わたしはこれを記憶と言いたい。これまた、われわれが動物と同様にもつ本能だが、われわれのそのほうが程度が高い。そのため、動物がわれわれを食い殺さないことがあるのは、彼らがわれわれを神々だと勘違いするかららしいのだ。

#### カリクラテス

なるほど、わかったよ。つまり、こういうことか。神は子狐に、父狐が罾に掛けられたことをなんとかして思い出させようとする。それで、この狐たちは父親の死因となった罾を本能によって回避するわけだ。神は周到にもわれわれシュラクサイ人の記憶に、2人のディオニュシオス<sup>(9)</sup>がずいぶんな悪政を行なったことを警告し、われわれの理性に、共和主義政府を吹き込むのだ。神は、羊を食べるように狼をわざとつくり出し、おきながら、狼が怖いから早く羊たちを帰らせなさいと、牧羊犬を追いかけて命令するのだ。神はいっさいを作り、整え、ひっくり返し、修復し、破壊する。自分がつくった法に絶えず背き、まったく無駄に骨を折っているのだ。それは「身体的予知」であり、「先行的神意」であり、「被造物に対する神の行動」<sup>(10)</sup>であるのだ。

#### エウヘメロス

きみは、わたしの話をひどく誤解しているか、さもなければ、わざと悪意をもってわたしに説明しているか、どちらかだよ。どんな瑣末な点も神に嫌気を起こさせたり、神の威厳を傷つけたりしないとは思ふが、わたしはなにも自然の支配者が瑣末な事柄を混ぜたと言っているわけじゃない。神は、人間や動物が常にそれに従って行動する、普遍的な、不易の、永遠の法を作り上げたのだと思う。このことはすでにきみに明言したはずだ。

『自然の体系』の著者、ディアゴラス<sup>(10)</sup>は、その長文の朗読の中ではほぼきみと同様のことを言っている。第2巻第4章に彼のこういう言辞がある。「あなたの神は絶えまなく作り出し破壊することに専念している。その結果、彼の存在の仕方に関するかぎり、不易と呼ぶことはできない」とね。

したがって、われわれは互いに相容れない性質によって神をつくり上げているのだと、ディアゴラスは言う。彼は神を、恐ろしくて滑稽な幽霊みたいに扱うのだ。だが、こういう重大な主題についてこれほど軽々しく決めつけるとはたいした大胆さだと、彼に言わせてもらいたいものだ。いつの時代にも常に不変の法によって生産と破壊とを交互に繰り返すというのは、行き当たりばったりに変えることではない。それどころか、常に自分自身に似ているということなのだ。神は生と死をもたすが、それをすべての人間にもたらすのだ。神は生と死を必要なものとした。常に一定の方法で支配しながら、その創造の計画を実行することにおいて、神は不易なのだ。もし神が、何人かの人間を永遠に生かすとすれば、その場合にはおそらく、神は不易ではないと言えるだろうが、すべての人間が死ぬために生まれる以上、神の不易性は十二分に立証されていることになる。

#### カリクラテス

その点ではディアゴラスが間違っていることを認めるが、神を自らの栄光のために自画自賛する目的で世界をつくった傲慢な存在のように表現し、ごく軽微な不服従者を永久に続く拷問で罰する過酷で執念深い支配者のように描き、自分の子供の何人かを気まぐれに寵愛し、その他の子供を際限もない不幸に運命づける、

そして何人かの兄弟たちを、彼らに必要なだった徳をもって報いるために有徳にし、大勢の弟妹たちを、彼らが犯さずにいることができなかつた罪ゆえ罰するために極悪にする不正で目のくらんだ父親に仕立てあげたとして、ある種のギリシア人たちを非難するのは大いに正しいではないか。要するに、神をばかばかしい幽霊や野蛮な暴君とするのは。

#### エウヘメロス

そんなのは断じて賢者の神ではない。それは人類の恥辱と恐怖をつくるシリアの女神に仕える何人かの神官たちの神だよ。

#### カリクラテス

そうかね、それでは最後にわれわれの疑念を晴らすために、きみの神をはっきり定義してくれたまえ。

#### エウヘメロス

この論駁の余地ない説だけで、神が存在することをきみに証明したと思うがね。つまり、こうだ。世界はみごとに作品だ。したがって、それ以上にみごとに職人が存在することになる。理性はわれわれにそれを認めることを強い、狂気はそれを定義することを試みる、だよ。

#### カリクラテス

なにひとつ知らず、なにひとつ言わず、ひっきりなしにわれわれに向かって大声で叫ぶだけ。そこになにか立派なものがあるのだが、それがなんであるのか、わたしは知らないというわけか。

#### エウヘメロス

ある島に上陸して、浜辺の砂に描かれた幾何学図形を発見した旅人たちのことを覚えているだろう。そのとき、彼らはこう言ったのだ。「元気を出そう。人間の足跡があるぞ！」<sup>(12)</sup> われわれストア哲学者は、この世界を見て、こう言うだろう。「神の足跡があるぞ」とね。

#### カリクラテス

その足跡を見せていただきたいものですな。

#### エウヘメロス

どこにだって見られるではないか。それに、われわれが享受しているこの理性、この本能こそ、明らかにこの見知らぬ偉大なる存在からの贈り物ではないか。理性や本能がわれわれの体から生まれるわけでも、われわれの住む泥水の中から出てくるわけでもないからね。

#### カリクラテス

これまできみが話してくれたことをよく反芻しているうちに、地上に広がった悪のことが難問となって胸につかえてはいるものの、神がわれわれの地球を支配しているとする考え方がわたしの中で固まってきたよ。しかし、きみもギリシア人のように、それぞれの惑星にその神がいると思うかい？ エジプトやペルシアやインドの王がそれぞれ自分の地域に君臨したように、ユピテル、サテュルヌス、マルスがその名をもつ惑星に君臨している、と思うかい？

#### エウヘメロス

そんなふうにはまったく考えないと、すでに言ったではないか。わたしの考えはこうだ。自分の目しか信じようとしない一般大衆が考えるように、太陽がわれわれの惑星群や地球の周囲を回っているにせよ、また、新しいカルデア人たち<sup>(13)</sup>のように、こちらのほうがはるかに真実性があるが、地球や惑星自身が太陽の周囲を回っているにせよ、太陽から土星まで連続的に放射される同じ光の奔流が、これらの天体にその距離に応じた時間をかけて到達するということは間違いない。この光条が土星の表面から地球に向けて、また地球から土星に向けて、常に同じ速度で反射するというのも間違いない。これほど広大な構造、これほど高速で均一な運動、これほど途方もなく遠く隔たった天体間のこれほど一定した光の伝達、これらすべてをつくったのは同じ神でなくてはありえないと思われる。もし同じように力のある多数の神々が存在するとすれば、それらの神々は異なる見解をもつか、同じ見解をもつかのいずれかだ。もし彼らの考えがまったく一致しなかったら、混沌があるだけとなるだろう。もし全員が同じ考えだったら、あたかも唯一神のみが存在するか

のような状況になるだろう。必要もないのに、存在の、とりわけ神々の数を増やしてはいけない。

### カリクラテス

しかし、もし上位の存在である偉大なるデミウルゴスが自分の下で治めるための下位の神々を生み出したのだとすれば、もし、彼がわれわれの太陽を彼の御者であるアポロンに、ある惑星を美しきウェヌスに、またある惑星をマルスに、われわれの海をネプトゥヌスに、われわれの大気をユノに託したのだとすれば、この種の序列をきみはばかばかしいと思うかい？

### エウヘメロス

その点で矛盾はまったくないと言いたいね。たぶん、偉大なる存在が天空とわれわれよりすぐれた生物の棲息場に住民を用意したというのはありうることだ。それはわれわれの想像を超える広大な野であり、美しい光景であるため、既知のすべての国民がそういうふう考えたのだ。しかし、わたしを信じてほしいのだが、その種の想像上の半神たちを認めるのは、それらの存在が証明されてからにしようではないか。この宇宙のなかでわたしが理性によって知っているのは、理性がわたしに証明し、わたしがその作品の証人である唯一の神だけなのだ。わたしはそれがなんであるかを知らなくても、それがあることを知っている。だから、彼の作品を検討するだけに止めておこうではないか。

### 〈注〉

- (1) アリストテレス哲学で形相(forme)が可能態(puissance)としての質量と結びついて自己を実現、完成した状態。実現されるべき目的としての形相の働きをも指し、ライブニッツによってモナド(単子)の別名とされた。小学館ロベール仏和大辞典(以下、DSR)。
- (2) トマス・アクイナス(Tomaso d'Aquino, 1225/27-74)が『神学大全(*Summa theologiae*)』第1部75問~82問にかけて、これをみごとに解き明かしているが、エウヘメロスはそれを予知できなかった。Voltaire, *Notes du Cinquième Dialogue* 1, CE, p.64.
- (3) 良能とも言う。倫理学、とくにキリスト教で道徳意識に内在し、善を求め悪をさけるように導く生来の能力。また、キリスト教で、神と一致する靈魂の本質。DSR。
- (4) この夢想家たちとは、ヴォルテールの『崇拜者たち(*Les Adorateurs*)』(1769)の中で引用されているゴメス・ペレイラ(Gomez Pereira)、ポリニャック枢機卿(Le Cardinal de Polignac)、ルイ・ラシーヌ(Louis Racine)を指している。Notes du Cinquième Dialogue 3, CE, p.64.
- (5) ギリシア神話で、戦死した英雄など、神々に愛された者が死後、幸福に暮らす野。
- (6) 本能とはむしろ、われわれの判断について明確な感情と持続的な記憶をもつために、あまりにも敏速かつ不用意になされる一連の推論の結果ではなかろうか。そして、これらの推論がなされたのも、その判断によってである。この敏速性は習慣の結果である。職人がそれぞれの職において必要な動きをするのは、われわれが歩くのと同じく機械的にするのである。しかし、彼らはその動きをするのを学ばなければならなかったのであり、自らの意志に基づく特定の行為によって一つずつ実践することから始めたのである。乳児や幼獣がいとも容易に乳を吸ったり、小鳥が餌を啄むことを覚えるのはこの見解によるが、この反論は解決不可能である。Notes du Cinquième Dialogue 4, CE, p.64.
- (7) 天の川。同上 5, p.64.
- (8) 古代メソポタミア南部のカルデア地方で活躍した古代セム人。
- (9) シュラクサイの僭主、ディオニュシオス1世(在位前405-367)とその子で、父の後を継いでシュラクサイの支配者となったディオニュシオス2世(在位前367頃-344頃)。
- (10) ロラン=フランソワ・ブールシエ(Laurent-François Boursier)がその『被造物に対する神の行動について(*De l'action de Dieu sur les créatures*)』と題する著作のなかで述べたトマス・アクイナスの哲学体系。『哲学辞典(*Dictionnaire Philosophique*)』の「観念(Idée)」の項参照。Notes du Cinquième Dialogue 6, CE, p.64.

- (11) つまり、1789年1月21日に死去したオルバック男爵(le baron d'Holbach)のこと。オルバック男爵が一つならず類似点をもつ実在のディアゴラスは無神論者ではなかったが、エレウシス(アネナイ西方の古代ギリシアの都市で、秘儀の女神デメテル信仰の中心地)の秘儀を笑ったために紀元前400年頃、アテナイ人たちによってばらばらに引き裂かれてしまった。同上 7、p.64.
- (12) Bene speremus, o amici! hominum enim vestigia conspicioとは、ウィトルヴィウス(Vitruvius、前1世紀のローマの建築家)が『建築書(*De architectura*)』10巻の前書において、キュレネの人、アリスティッポス(Aristippos、前435-350頃)がロードスの海岸で難船事故に遭った際、彼に捧げた言葉。同上 8、p.64.
- (13) コペルニクス(Copernicus)とガリレイ(Galilei)のこと。同上 9、p.64.